



## 👁️👁️ みどころ

20世紀が原爆(原子力)の時代なら、19世紀はエジソンが発明した電気の時代。20世紀を迎える年に20歳になった、ブダペスト生まれの双子の姉妹である気弱な革命家リリと華麗な詐欺師ドーラは、謎の男Zとの間でどんな恋模様を・・・？

「マッチ売りの少女」のような物語からスタートする本作は、一貫して寓話的だが、女と男についての学術論争も興味深い。

さあ、「東京2020」を直前にした21世紀の今、本作を契機にあらためて「あなたの20世紀」を考えてみては如何・・・？



## ■□■ハンガリーの、この女性監督に注目！■□■

ハンガリーの女性監督イルディコー・エニエディは、その最新作『心と体と』(17年)で2017年の第67回ベルリン国際映画祭で金熊賞など4冠を受賞したが、私は同作の“クソ難しさ”について行けなかった(『シネマ42』未掲載)。しかし、この女性監督は1955年生まれだから、私より5歳若いだけ。そんな年で、2017年の時点で、なおそこまでの活躍を続けているのはすごい。

そんな彼女の長編デビュー作である『私の20世紀』(89年)は1989年のカンヌ国際映画祭でカメラドール賞(新人監督賞)を受賞し、世界的な注目を集めたようだ。しかし、平成の時代がはじまった1989年に公開された本作が、なぜか平成の時代が終わる2019年の今、4Kレストア版で復活！時代は既に21世紀に入っているが、ハンガリーの才女イルディコー・エニエディ監督が1989年に描いた『私の20世紀』とは・・・？

去る3月21日に観た若き巨匠ネメシュ・ラースロー監督の『サンセット』(18年)は、第一次世界大戦直前の1913年におけるオーストリア＝ハンガリー帝国の有名帽子店を舞台として、第一次世界大戦が始まる「サンセット」の時代(の暗さ)(=世紀末)を描いた難解な映画だった。それに対して、1989年公開の本作で20世紀を振り返ってみると・・・？

## ■1989年(平成元年)はハンガリーも体制転換の年!■

1989年は6月4日に天安門事件が起き、11月9日にベルリンの壁が崩壊した歴史的な転換点の年。日本でもその年にバブルが崩壊し、天皇陛下の崩御により時代が昭和から平成に転換した。本作のパンフレットにある早稲田みか氏(大阪大学教授)のコラム「二十世紀の光と影が織りなす、笑いと寓意に満ちた幻想譚」によれば、そんな1989年はハンガリーにとっても、「社会主義国家から自由な民主主義国家へと体制転換を遂げた歴史的な年」らしい。そのため、

①今でこそ、百花繚乱の感のあるハンガリー映画だが、社会主義時代のハンガリーでは映画制作も国家の文化政策のもとにあったから、そこには自ずとある種の傾向が生じた。

②ハンガリーを代表する映画監督、ヤンチャー・ミクローシュ『密告の砦』(77年)、『ハンガリアン狂詩曲』(79年)や、タル・ペーラ『サタンタンゴ』(93年)、『ヴェルクマイスター・ハーモニー』(00年)らの作品はどれをとっても重々しく息苦しい、いかにもハンガリー的な映画だ。タルの最後の作品『ニーチェの馬』(11年)など、この世の終焉が描かれていて、映画の終わりで世界が真っ暗闇につつまれる。

③電球の明かりが夜を明るく照らすシーンで始まるこの『私の20世紀』とは、まさに正反対である。「人類史上もっとも愚かしい世紀」の始まりを描いてはいるが、そこに絶望感や閉塞感はない。男性支配社会を声高に批判する、それまで(60-70年代)のフェミニズム映画とも一線を画している。女性監督エニエディは、冷静で示唆に富む知性と愛情とユーモアをもって、私たちの世界を描きだす。

と書かれている。本作の鑑賞については、ことさら政治的状況と対比させる必要はないが、1989年がハンガリーにとっても体制転換を遂げた歴史的な年であることだけは押さえておく必要がある。

## ■エジソンは知ってるが、この男は?あの本、あの犬は?■

20世紀最大の発明は原子力(原子爆弾)だが、19世紀最大の発明は電気。電気を発明したのが発明王エジソン(1847~1931年)であることは誰でも知ってるが、本作冒頭、1880年にニュージャージー州ミドルセックス郡メンローパークで行われたフィラメント電球をお披露目する華やかなパレードを見ていると、そのことがよく分かる。

本作の主人公は、それと同じ頃にハンガリーのブダペストで母親(ドロタ・セグダ)が

産んだ双子の姉妹。リリとドーラと名付けられた2人は、その後孤児となり、「マッチ売りの少女」のようなシークエンスの中、それぞれ2人の紳士に別々にもらわれていくことになる。その後、成長をとげた2人のうち、リリは気弱な革命家となり、ドーラは華麗な詐欺師になっていたが、本作にはリリが手にするロシアの政治思想家・地理学者であるピョートル・クロボトキンの著書『相互扶助 進化の原因』（『相互扶助論』）が登場する。すると、ひょっとしてこれも20世紀を代表する本の1冊？

他方、本作で双子の姉妹と何とも不可解な“男女の物語”を展開していく男がZ（オレーグ・ヤンコフスキー）。このZは、エジソンが電灯に不可欠なフィラメントを発見することにも協力した男だが、Zが出席したソルボンヌ大学の講義では、回転磁場の法則を適用して誘導電動機を発明したニコラ・テスラ（1856～1943年）が電流実験を披露するので、それに注目。さらに、本作では、条件反射で有名な「パブロフの犬」も登場する。今でこそこれらの評価はそれぞれ固まっているが、1899年の大晦日を20歳で迎えた双子の姉妹にとって、この男は？この本は？この犬は？さらに、リリがフェミニストの集会で聞いた、オーストリアの哲学者オットー・ヴァイニンガーの極端な女性蔑視と反ユダヤ主義を主張する講義とは？これらは、私を含めてほとんどの日本人が知らない人物や著書だから、本作を理解するためにはしっかり勉強する必要がある。

## ■□■双子姉妹に恋したZは？■□■

4月19日から公開された、秦の始皇帝らを描く、大スペクタクル『キングダム』（18年）は、黒澤明監督の『影武者』（80年）と同じような「そっくりさん」が面白いストーリーを構成していた。それに対して、3月21日に観た『たちあがる女』（18年）は、顔はそっくりだが性格も価値観も全く異なる双子の姉妹が主人公になっていた。本作は、それと同じように、姿形、そして美しさは全く同じだが、仕事も性格も、そして男に対する価値観も全く異なる双子姉妹リリとドーラが主人公だ。

「オリエント急行」はアガサ・クリスティの小説や映画で有名だが、本作の実質的ストーリーは、20世紀を迎える直前の「オリエント急行」に偶然乗り合わせたこの双子の姉妹の姿からスタートする。もっとも、20歳に成長した2人の境遇は大違い。つまり、リリは今、同志から渡された伝書鳩を大事に抱えながら、満員の電車で不安に過ごしていたのに対し、ドーラは食堂車で豪華な食事を楽しみながら男達を弄んでいた。そして、ブダペストで降りた双子は、世界中を飛び回る謎めいた男Zと出会うが、男慣れしていないリリは図書館で目が合ったZに惹かれていくことに。他方、ドーラは豪華客船で一夜の遊び相手としてZに目を付けるが、Zの方はリリとドーラが双子の姉妹だとは知らないから、ちょっとヤバイ。顔はそっくりだが、出会う時によって対応が全く違うこの若くて魅力的な女に、Zはどう接していくのだろうか？Zの活動場所は広く、神出鬼没。ところが、双子の女の方もその都度姿を変え、形を変えてZの前に登場するから、互いに翻弄されっぱ

なしだ。さあ、そんな中でもホントの恋は芽生えていくの？

そんな興味もあるが、本作では一種の“寓話”として、この中年紳士と美しい双子姉妹の恋模様(?)をしっかりと楽しみたい。

## ■□■「東京2020」を直前に、「あなたの20世紀」は?■□■

「東京2020」を控え、また30年間続いた平成の時代が終わろうとしている今、時代は21世紀。その21世紀は間違いなくAI（人工知能）の時代となるから、自動車の無人運転の世界も近々始まるだろう。そんな時代状況の中、“近未来もの”、“SFもの”の映画が次々と公開されている。そんな今、なぜ『私の20世紀』が4Kレストア版で？

本作のパンフレットには、前記の早稲田みか氏のコラムの他、遠山純生氏（映画評論家）の「二十世紀は誰のものか」と題する7ページにわたる長編コラムがある。そこでは、①丸い光、②女と男、③自然界と前近代、④「性的役割」への異議、⑤生まれ変わること、に分けて、本作が描く「私の20世紀」について面白く解説している。本作では、Zがリリとドーラの双子の姉妹に戸惑ってしまったように、私たち観客も寓話的なストーリー展開に戸惑う面が多い。しかし、それを補ってあまりあるのが、双子の姉妹の魅力だ。男を挑発することに生きがいを見いだしているドーラはもちろん、内気な革命家のリリもかなり魅力的だから、Zがこの双子に惹かれていったのは、ある意味当然だ。21世紀の今は、男と女を巡る論争は、男女差別の撤廃やLGBT（レズビアン・ゲイ・バイセクシャル・トランスジェンダー）一色になっているが、本作では女と男、さらにその性的役割を巡るクソ難しい学術論争が展開されるので、21世紀と20世紀におけるその対比もしっかり試みたい。いずれにしても、「東京2020」を直前に「私の20世紀」をテーマとしたこんな面白い映画を鑑賞できたことに感謝！

2019（平成31）年4月26日記